永遠と一瞬

ミサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永遠と一瞬

【Ｎコード】
Ｎ７０１９Ｂ

【作者名】
ミサキ

【あらすじ】
ギャグマンガ日和の遣隋使コンビや奥の細道コンビの小説になると思います。他のキャラ達も登場すると思います。一つ一つの話はつながっていません。

第一話　理由（遣隋使）

自分でも何であのアホ偉人を好きになったのかは分からない。
僕が遣隋使に選ばれていなかったら、彼は雲の上の存在のままだった。
僕は下等豪族で彼は皇族で、この間にはどうしても埋められない隙間があって・・・

「・・・何で冠位5位の僕が遣隋使に選ばれたんだろう。他にも適任の人はたくさんいるはずなのに」

しばらくして襖（ふすま）が開き、誰かが入ってきた。

「妹子～少しの間、匿（かくま）ってくれないか？」

「太子、また何かやらかしたんですか？」

「やらかしたって、お前は普段、私をどんな目で見てるんだ」

「馬鹿とか阿呆（あほ）とか。他にも色々と有りますけど、聞きたいですか？」

「いや、いい」
何でいつも妹子は妙に私に対して辛辣（しんらつ）なんだ。

「ところでどうしたんですか？また仕事をさぼってたとか？」

「そのまさかだよ。今日はやる気が出ない日でね。馬子さんも仕事をしろってうるさいし。逃げてきた」

「それで何で僕の所に来るんですか？」

「妹子が私がいなくて寂しいだろうと思って」

「・・・何で僕が太子がいなくて寂しいと思わないといけないんですか。仕事の邪魔なんで出て行ってくれませんか？」

「・・・少し傷ついたぞ」

「それはおいといて。今まで気になっていたんですけど、何で太子は僕を遣隋使に選んだんですか？」

「いきなり話を変えたな。それはお前が冠位5位の割に有能だという話を聞いたからだ。

実際、私はお前を遣隋使に選んで良かったと思っている」

「それ、誰が言っていたんですか？」

「馬子さんだ。冠位十二階も結構役に立ったな」

「僕も遣隋使に選ばれて良かったと思っています。

そういう事がなかったら、僕は一生太子と見(まみ)えることもなかっただろうから」

「妹子のおかげでやる気が出た。私は帰るから」

太子は立ち上がり襖(ふすま)を開けて出てこうとして、妹子にこう言った。

「仕事をするのもいいが、程々にしろよ。妹子に倒れられでもしたら私が困る」

「はい」

そして太子は帰っていった。

「太子、ああ見えて色々と考えてるんだよな。やっぱ凄い人だなぁ」

「今度、家に呼んでカレーでも作ろうかな。
太子喜ぶかな・・・そういえば今日は珍しくカレー臭くなかったな。
いつも異臭放っているのに」

きっと僕の家でもジャージ着ろってうるさいだろうな。
今日は久々にジャージじゃない太子を見れて良かったな。正装の
方が格好いいのに。何でいつもジャージなんだろう。

第一話　理由（遣隋使）（後書き）

妹子が乙女受けになってしまいました。
もうこれ妹子じゃない（単行本3巻で太子が言った『もうこれまぶたじゃない』と同じ様に）
読んでくださった方有難うございました。
良かったら感想お聞かせ下さい。

第二話　旅の一コマ（奥の細道）

「曾良君～疲れた～。とりあえず、あそこの宿で一泊しない？」

「何文句言ってるんですか芭蕉さん。断罪チョップ喰らわしますよ？」

弟子が妙に怖い（いつもだけど）

「そんな事言わずにさ、曾良君の好きな甘い物買ってあげるから」

「・・・それなら良いですよ」

甘い物には弱いんだよな、曾良君。そういう所が可愛いんだけど。

「何か言いましたか？」

「何も言ってないです」

「結構立派な宿だねぇ。前に行ったお化け屋敷の様な宿とは大違いだ」

「あれはただ芭蕉さんが勘違いしてただけじゃないですか。僕の事をお化けとか言っていたし」

「でもこの前、曾良君が憑かれてるなとか言ってたじゃないか」

それで勘違いしてたのか、この馬鹿は。

「疲れてるの間違いでしょう」

手をポンと叩き、
「そうだったのか！憑かれてるとか言ってたから、てっきり首も３６０度曲がるのかと思ってた」
「あんた、阿呆ですか？」
「師匠に対して阿呆とか言わなくても・・・松尾バションボリ」
何でこんな人が師匠なんだか・・・
「ほら、芭蕉さん。着きましたよ」
「・・・何か出そうな雰囲気の部屋だね。例えば幽霊とか」
「・・・何を言ってるんですか。入りますよ」
その部屋は外装からも分かる様にとても立派な部屋だった。
そして目を引くのは他の旅館に飾ってあるものより一際（ひときわ）大きい掛け軸。
「何かこういう掛け軸の裏にはお札とか貼ってありそうだよね」
掛け軸を捲（めく）り、その後ろを見てすぐに戻す。
・・・お札が有った・・・まさか幽霊とか本当に出たりしないよね。
「芭蕉さん、温泉の方に行ってきます」
「えっ・・・ちょっと曾良君！置いていかないで！」

行ってしまった・・・それにしてもこんなに大きい宿なのにお客さん見かけなかったな・・・
それにこういう時って残されてる方から、順番に襲われるんじゃないっけ・・・

「よし！私も温泉に行こう！」

襖（ふすま）を開け、意気揚々と出て行く。

さっきは曾良君と一緒だったから気付かなかったけど、何か妙に暗い。
お化けとか幽霊とか出てきませんように・・・

「・・・・・・芭蕉さん」

「ひっ・・・はぁ何だ曾良君か・・・」

「何だとはなんですか。まさかまた僕をお化けと思ったんじゃないでしょうね」

「全然全く思ってないよ」
ちょっと思ったけど。

「また僕のことをお化けとか言い出したら、ひねり殺そうかと思いましたよ、全く・・・」

それは師匠に言う言葉じゃないよ。
「それはそうと、どうしたの？さっき温泉に行ってたよね」

「甘い物を買ってもらうと約束したのに忘れてたので、買ってもら

おうかと思いまして」

「そういう事はきっちりしてるんだから。で、何がいいの？」

「５万円のまんじゅうです」

「高っ・・・こっちの５００円のまんじゅうの方が良いよ」

「芭蕉さん、５、６万ぐらい持っていたでしょう。有り金全部はたいて買えば良いじゃないですか」

「何で私の財布の中のお金を知っているのか気になるけど、分かったよ」

おみやげ屋さんに５万を渡してまんじゅうをもらい後ろを見ると曾良君がいなくなっていた。

「あれ？消えた・・・」

まさか・・・さっきのって幽霊？

「はは・・・まさかね・・・とりあえず、部屋に急いで帰ろう」

急いで走り、勢いよく部屋の襖（ふすま）を開けると既に曾良君が座っていた。

「芭蕉さん、今までどこに行っていたんですか？」

「・・・さっき私と一緒にいなかった？」

「今まで温泉に入っていたのに芭蕉さんと一緒にいた訳がないでし

ょう」

「・・・ま、まぁいいや。さっきまんじゅうを買ってきたんだ。一緒に食べよう」

今までの事はきっと自分の勘違いか何かだと思おう。

第二話　旅の一コマ（奥の細道）（後書き）

芭蕉さんと曾良君って確か5歳違いなんですよね。ギャグマンガ日和を見てると信じられないです。
アニメで曾良君と太子が前田剛さんで、同じ声優だというのも信じられないです。
読んでくださった方有難うございました。良かったら感想の方もよろしくお願いします。

第三話　出会い（遣隋使）

これから聖徳太子に会うのか。かなり緊張してきた。聖徳太子ってどんな人なんだろう…

怖い人じゃなかったらいいな…

とここに入ったのはいいものの、何故この人はジャージなんだ…？それに漫画読んでるし。

明らかに身分にあぐらかいてるよこの人。

「聖徳太子、初めまして。この度、遣隋使に任命されました小野妹子です。隋との国交のためがんばります」

「君が小野妹子か」

意外と可愛いじゃないか。でもあの顔見た事が有る気がする。どこかで会った事が有ったっけ？

「あの、太子何でジャージ着てるんですか？」

よくぞ聞いてくれましたという感じで身を乗り出し、太子はこう言い放った。

「このジャージを制服にしようかと思ってて…でも馬子さん達は賛成してくれないんだ」

だから、この人時々アホとか朝廷内で言われてるんだ。今僕も思ったけど。

「家で着るならまだしも朝廷でジャージなんて有り得ないじゃないですか。実際、僕も今の制服の方が好きですよ」

何故、妙に厳しいんだよ全く。親の顔が見てみたい。

「有り得ないって…じゃあ私がジャージ着ているうえにノーパン主

義だったらどうする？」

どうするって…太子…

「もしかして、今日、ノーパンなんですか？」

「うん。昨日も一昨日もだったけど」

さも当然の事の様に言っちゃってるよ。

「倭国の政（まつりごと）を任されている人が何をやってるんですか？そんな事だから隋等の大国に甘く見られるんですよ」

「気にしてる事をズバっと言うんだね君は。だから妹子を遣隋使に選んだんだよ」

「でもさっき馬子様に太子も隋に連れて行ってくれと頼まれたんですが、太子聞いてなかったんですか？」

「全然聞いてない」

「僕としては太子に来て頂かない方がありがたいんですが、駄目ですよね？」

それを聞いた太子は胸を張りつつ、

「私はこんな事もあろうかと思って、もし隋に行ったら何をやりたいかという事を考えてきたんだ」

「何をしたいんですか？」

「パンダの捕らえ方とか…」

「…あんたは一体何を考えているんですか？大体パンダの捕らえ方を聞いた所で倭国にはパンダなんていないでしょう。もっと真面目に考えてください」

「どんどん口が悪くなってる…でも私はやると言ったらやる男だからな！妹子に反対されても、私も隋に行くぞ！」

これが僕と太子の出会いだった。この頃は太子との関係があんなに長く続くなんて思っていなかった。

第三話　出会い（遣隋使）（後書き）

今年の秋に月刊ジャンプが休刊になるらしいんですが、
ギャグマンガ日和は他の雑誌に移って連載続けて欲しいです。
あと佐倉ケンイチ先生も帰ってきてもらいたいです。そしてドラゴンドライブの伏線（クリオネ学園の事とか）を是非書いてもらいたいです。
読んでくださった方有難うございました。よかったら感想お聞かせ下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7019b/

永遠と一瞬

2010年10月9日10時26分発行